

猪16 手負い猪に追われて = = = 猪・鹿・狸より

何と云うても猪の話では、狩りの逸話が華やかであった。旧幕時代から鳳来寺山禰宜の一人で、山麓門谷の旧家であった平沢利右衛門と言う男は、六〇年も前に故人であったが、今に噂に残る狩り好きでかねて猪狩りの名人であった。体格も勝れていて人柄も備わって、若い頃は二十四孝の勝頼を見るようであったと言うから、その武者ぶりも想像された。しかも剛胆この上もなかったと言うから、狩人には申し分ない男であった。いつも下男を供につれて、狩りに出掛けたそうである。そして少しも猪を恐れなんだ。如何な猛猪に遇っても必ず撃止めて、かつて後を見せたことはなかった。これに反して伴の下男はお定まりの腰抜男であった。いつも狩りの供という、また今日もかと言うては泣いたそうである。かほどの剛胆者が生涯にたった一度手負い猪に追いかけて逃げたことがあった。しかも田圃へ続く柴山を転がるようにして逃げたと言うた。門谷の高徳の山で、巨猪を撃ち損じた時であった。下男は逸早く逃げてしまつて無事だったが、一方主は柴山から田の脇の道を走って逃げた。それを猪は何処までも追いかけて来た。はや背中へ掛かりそうに迫った時、折柄目の前に馬頭観音を祀ったシデの大木が立っていた。それに身を交して、やっと根元を廻って逃げた。そうして人と猪と、その根元をくるくる独楽のように七廻りまで廻ったとはずいぶん劇しい動きであった。そのうちどこでどう火縄の手捌きをやったか、もの見事に後から一発、さすがの巨猪を斃したと言う。後から一発はちとあやしいが、実は劇しく廻るうち、猪を追いかけるような形勢になったと言うのである。どうやら壮快の域を通り越して、話になってしまったのは惜しかった。実はその劇しい動きを、下男が遠くから見物していたのだそうである。

家柄もよく身分も、禰宜であったが、生来の殺生好きで、夏分は毎晩のように、下男をつれて川へ網打ちに行くのが仕事だったと言う。わが村には網を入れるほど広い川がなかった。それで山路一里半も越えて、寒狭川へ出かけたのである。ある晩横山の寄木の瀬にかかったとき、岩の間に川流れ（土左衛門）が引っ掛かっているのを知らずに踏みつけたが、格別驚いた様子もなかった。何だ川流れかと言いながら、二度胴中を踏んで見て、さらに川を降って網を入れた剛胆さには、さすがに下男も呆れはてたと言う。

今に生き残っている老人たちの話によると、年をとるに従って、あまりに狩りに対する自信が強すぎて困ったと言う。他人がせっかく撃ったものまで、獲物を見れば何でも俺が撃ったなどと、頑張って仕様がなかったそうである。ときとすると筒音を聞いてからよちよち出かけて来て、俺が撃っておいたが、よく運んでくれたなどと、とぼけるのか、そう思い込んでいるのか、無態なこと

を言い出して弱ったと言う。対手が対手だけに、泣き出しそうになった狩人もあった。そしてもうその頃は、髯も髪も真っ白い凄いな老人だったそうである。

剛勇比類ない狩人のあった一方には、また笑い話の種になるほどの弱い狩人の話もあったのである。

鳳来寺村玖老勢の、遠山某と言う代官上がりの男は、大達（おおだて）の山で手負い猪に掛かって、臀の肉をひどく喰われて、半死半生になって、それがもとでついに命まで縮めたと言うた。猪が人間を食った話は信じられぬから、畢竟噛まれたとか、牙にかけられた類の話を通り伝えたこととも思われる。明治初年のことで、平素からあまり好感を持たれない、代官上がりの武士だっただけに、ことさら興味深く笑いにされたのは気の毒でもあった。